

高齢者の認知症への理解と対策

Understanding and measures for dementia elderly

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 生活マネジメント研究室

奥山 愛理沙 指導教員 氏家 和彦

認知症, 高齢者, 認知症サポーター, オレンジリング

1. 研究目的

近年、認知症の高齢者はますます急増している。そのため高齢者が引き起こす交通事故や、介護疲れからの無理心中など、悲しい事件を耳にすることも増えた。そこで、増え行く高齢者とこれからの未来を支える若者たちが、支えあいながら共存していかなければいけない。そのために、若者が認知症について理解を深めてもらうための機会を作るための提案をする。

2. 調査内容

そもそも認知症とはなんなのかというと、「生後いったん正常に発達した種々の精神機能が慢性的に減退・消失することで、日常生活・社会生活を営めない状態」のことを指す。認知症にはさまざまな種類があるが、その大半がアルツハイマー型である。

それらから引き起こされる認知症の症状には、人によって様々だが、認知症の方に必ず現れる中核症状と、そこに本人の性格や環境の変化などが加わって起こる周辺症状があります。

そんな認知症だが、近年数はますます増加していて、65才以上の高齢者のうち認知症を発症している人は推計15%、462万人に登る。認知症の前段階である軽度認知症を含めると、およそ65才以上の四人に一人が認知症とその予備軍になっている。

(図1)

社会的に見て問題になってきている認知症に対して国が取り組んでいることの一つが、厚生労働省により策定された新オレンジプランである。この施策では、認知症の人が住み馴れた地域のいい環

境で自分らしく暮らし続けるために必要としていることに的確に答えていくことを旨としつつ、7つの柱に沿って施策を総合的に推進している。

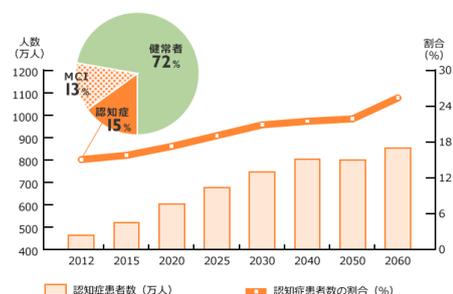


図1 :

これを受け、町田市では7つの柱の一つ目「認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」に含まれる認知症サポーターの養成と活動の支援に力を入れている。認知症サポーターとは認知症に関する正しい知識と理解をもち、地域や職域で認知症の人や家族に対してできる範囲で手助けをする人のことである。特別な職業や資格ではなく、自分の日常生活の中で、認知症への理解と支援の心を思って積極的に行動するだけだ。町田市では約23000人のサポーターを育成した。また、さらに理解を深めるための「認知症サポーターステップアップ講座」も実施し、953人が参加した。認知症サ



図2 : オレンジリング

ポーター講座に参加すると、その証としてオレンジリングというラバーバンド (図2) がもらえる。

3. 現状

以上の調査から、認知症への理解を深め、認知症高齢者にも住みやすい町にしていくには、国の施策でもある認知症サポーターをより増やしていくべきであると考えます。しかし認知症サポーター講座自体は積極的に市が動いていることもあり、数は増えているが、そこからさらに関心を持ってステップアップ講座も受講している人は認知症サポーター講座を受けた人の内、4%しかいない。講座を受けた人自体は多いものの、実際に意識が変わった人が少ない、というのが現状である。つまり、ただ認知症サポーターをふやすだけでなく、根本的に認知症患者に対する意識から変えていくこと必要とされる。そのためには認知症サポーター講座だけでなく、ステップアップ講座も受講すべきではないかと考えている。

4. コンセプト

現状から私が掲げるコンセプトは、「楽しく、おしゃれに」である。

認知症高齢者に対する意識を変えてもらうには、まず興味を持ってもらうことが第一であると考えます。しかし、高齢者と接する機会がなく、普通に生活している若者はなかなか自分から興味を持つことがないのが実際のところである。そこで、講座に参加した証としてもらえる新たなグッズを提案する。現時点では上記のオレンジリングが存在しているが、もらっても付けないまましまったり、若者の心をつかむには少し足りていないと感じる。若者が満足する、ほしいと思うおしゃれなグッズを配布できれば、もの欲しさに講座に参加したり、より興味を持つきっかけとなるのではないかと考える。

また、より親しみやすいデザイン、モノにすれば、講座に参加した人々が日常的に身に付けやすくなり、サポーターとしての目印にもなると思われる。サポーターとして一目でわかれば、高齢者の方が困った際にも気軽に声をかけやすくなり、よりやさしい街になる。

5. アイデア展開

高齢者関係のイメージカラーであるオレンジ色をメインに取り入れて構成するように考えた。



アクセサリ類だと、やはり男女ともに着けやすく、デザインを選ばないミサンガでスケッチを展開した。紐だけのシンプルなデザインから、石やビーズを着けたデザインを考えた。



アクセサリ以外では、カバン、衣服など様々な場所につけられるストラップ類で展開した。リボンやひもなどを使ってシンプルに多く考えた。

4. 今後の展開

今後の展開としては、ブレスレットのアイデア展開をさらに広げていき、試作を交えてデザインを絞っていく予定だ。また、実際にアンケートを取って意見を取り入れていき、最終デザインの確定に向けて動いていこうと考えている。

5. 参考文献

全国国民健康保険診療施設協議会

https://www.kokushinkyoo.or.jp/Portals/0/Report-houkokusyo/H17/H17認知症_パンフレット.pdf
厚生労働省

https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_recog.html

国立循環器病センター循環器病情報サービス

<http://www.ncvc.go.jp/cvinfo/pamphlet/brain/pamph107.html>

(2019年7月参照)